

経営の「こつ」を尋ねる 第6回

原点は、古民家 日本本来の家づくりが 地域の工務店と大工を守り育てる



河井 英勝氏
橋本建設会長
広島県工務店協会会長

廿日市高建築科卒。大手ゼネコンに14年間勤務し、義父が代表を務める橋本建設に入社。1976年社長に就任。2013年から会長。日本最大の工務店ネットワーク「JBN」と連携する広島県工務店協会の会長で、JBN副会長も務める。1944年6月14日生まれ、旧高洲ハルピン出身。

永続する企業、伸び続ける企業の経営には職人的な勘所がある。月1回連載でインタビュー。牛来千鶴が経営の「こつ」を尋ねる。

先代が連れていた人材を総替え 大工ゼロ人からのスタート

「本来、工務店は世襲であるべき」
3代続いた大工の娘と結婚し、橋本建設を継いだ河井会長は、大手ゼネコンで14年間、建築技術者として勤めた後に入社した、異色。

1970年代当時。建方時の飲酒やねじり鉢巻きの格好など、前職では考えられない現場の様子を見て、驚いたという河井会長。早々にルールを改め、大工の教育に注力した。事故防止のため足場を丸太から鋼製足場に変えるなど、業界初の環境改善にも取り組んだが、

「時代にマッチした大工を育てる」という考え方は理解されず、なんと先代の周辺の大工たちにポイコックトされ、数年のうちに、抱えている大工がゼロ人という窮地に陥った。
結局、断念し、人材の総入れ替えを行った。きつと周囲の反対もあったことだろう。先代との軋轢はなかったか、との問いに、
「仕事上は、何も言われなかった」と言う河井会長。きつと、周りに信じさせるだけの強さを持っておられたのだろう。

スメーカーだった。プレハブ工法は、震災時などに短期間で大量の家を建てる必要がある時に威力を発揮する。神戸や東北の震災などでも、その記憶は新しい。
しかし、
「本来、地場にいる人が家を建てるという、世界共通のことが、日本ではハウスメーカーが建てるのが当たり前になった。この家づくり事情は、日本独特」
と、河井会長。

プレハブ工法では、家の寿命は短い。築300年の古民家が存在するように、本来、家というものはメンテナンスをしっかりとやれば、30、40年どころでダメになるものではないのだ。
バブル期には、同社も、ハウスメーカーの下請けの仕事で利益を得たが、しかし大手はずつとそこにとどまるわけではなかった。需要が無くなりメーカーが撤退した後に残るのは、職を失った地元工務店であり、大工だった。

仕事が減り、多くの社員や大工を抱え続けるのは大変。しかし、工務店と大工を絶やせば、本来の日本の家づくりができなくなる。
「工務店は大工を抱えよう」
と、河井会長は、その重要性を訴え続けている。
**会社が元気だからこそ
でかいよ!**

1991年、広島。台風19号の被害が大きかった時。塩害で停電したり、瓦が飛んで雨漏りがしたりと、住民の生活に大きな影響をもたらした。
「すぐ来てほしい」
と地元の人からの連絡を受け、駆け付けたのは、地元の小さな工務店だった。
「大工や技術屋と、3日間で300数十件も、駆けずり回った」
と、当時を振り返る河井会長。

(第3種郵便物認可)



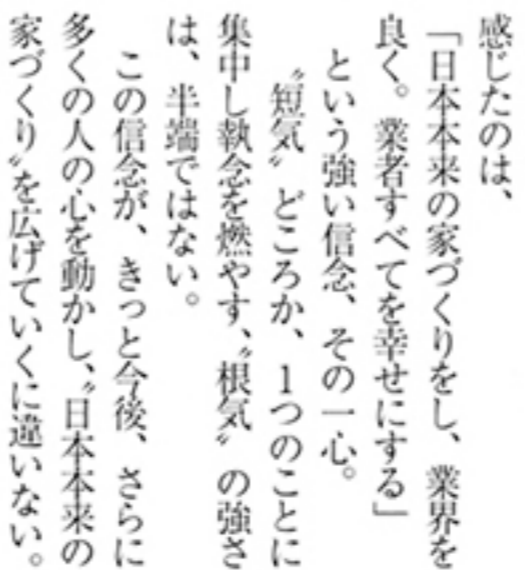
「平常時はまだいい。しかし災害時に必要とされるのが、地元の工務店。『元気でこそ』それができるのだ」
と、河井会長の言葉に力が入る。
「メンテナンスをきちんとすれば、日本の家は何百年ももつ」
その意味の深さを感じた。
確かに、木は燃えやすく、白アリにむしばまれることもある。しかし、鉄だつてさびるし、コンクリートは自壊する。木造の家を、身近な地域の工務店に定期的に診てもらってあげば、火事さえ起こさないうえ、改修しながら何年も何十年も、孫の代まで住める家になるのだ。そして、そんな家が増えることで、大工の仕事は継承され、地元の小さな工務店が生き残る。
「まちの医者みたいなもんですよ」
そう語る河井会長。
それを維持するには、企業努力だけでなく、消費者の意識も変えなければ…。目先の損得だけでは計れない大切なことが、そこにある。

**日本の木材は
実は、余っているという事実**
「木は、光合成によって二酸化炭素(CO₂)を吸収してくれる。木材となつてその中に数十年、長くは数百年もCO₂をため抱えてくれて、最後は炭になることで炭素を燃やして、結局はプラマイゼロとなる」
と、河井会長。
日本最大の工務店ネットワーク「JBN」と連携し、国へも提言してきたおかげで「長期優良住宅」を普及する法律もでき、施主への補助金や、優遇制度が施行された。
「やつと、周りが追いついてきた」ということか。自らを、短気。と

**工務店75社がスクラムを組み
地域材で「長期優良住宅」推進**
河井会長が代表を務める広島県工務店協会は、この9年間で会員は75社までに増えた。地域木材を活用した家づくりや、個々の工務店ではなかなか難しい技術者の育成や広報活動、地域型住宅ブランド化事業等を行っている。
外国の木材を使っても日本の環境改善に役に立たない。
そんな理由から、当社は、国産材、地域材で家を建てることを推奨している。
「国産材は、希少なのでは？」
という疑問がわくが、外国材の方が安いのは、量の問題ではなく、広い平野で伐採できる地理的な事情から。
一方、日本の山は急傾斜が多く、伐採機が入りにくい。搬送もしにくいため、どうしても価格が高くなるのだ。結果、売れないから山の仕事では稼げない。森林国なのに、残念なことである。
国の政策や人々の活動により、国産材を使用する割合は、27、28%まで回復したが、さらに「これを50%にしたい！」
と、河井会長は意気込む。

「インタビュー」牛来 千鶴
ソアラサーピス社長。人肌感覚のクリエイティブ共同オフィス「ソアラビジネスポート」を運営。「広島に、あったらいいな」をカタチに「を理念に掲げ、地場企業とのコラボレーション商品開発や人材育成など、地域を元気にするプロジェクトを推進している。」

評する河井会長だが、取材を通して感じたのは、
「日本本来の家づくりをし、業界を良く。業者すべてを幸せにする」という強い信念、その一心。
短気。どころか、1つのことに集中し執念を燃やす、根気の強さは、半端ではない。
この信念が、きつと今後、さらに多くの人の心を動かす、日本本来の家づくりを広げていくに違いない。日本の家が、本来の姿に戻っていく様が、目に浮かんだ。



「1000年ももつ」
そうだ。
外国の木材を使っても日本の環境改善に役に立たない。
そんな理由から、当社は、国産材、地域材で家を建てることを推奨している。
「国産材は、希少なのでは？」
という疑問がわくが、外国材の方が安いのは、量の問題ではなく、広い平野で伐採できる地理的な事情から。
一方、日本の山は急傾斜が多く、伐採機が入りにくい。搬送もしにくいため、どうしても価格が高くなるのだ。結果、売れないから山の仕事では稼げない。森林国なのに、残念なことである。
国の政策や人々の活動により、国産材を使用する割合は、27、28%まで回復したが、さらに「これを50%にしたい！」
と、河井会長は意気込む。

(第3種郵便物認可)